
黒伯爵の妃

紫月 香夜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

黒伯爵の妃

【Nコード】

N3057Y

【作者名】

紫月 香夜

【あらすじ】

戦場では負け知らずという、常に敵を殲滅する魔將軍ガレリウド。彼が主君と仰ぐガレヴァーン侯爵から新たな命令を受ける。

強大な敵を迎え撃つ戦かと思っていたが、それは「妃を娶って子を為せ」という命令。

娶るまで戦場に行くことを禁じられ、憤怒していた所に一筋の希求の光が届く。

それは異世界からで、絶望の余りに自害しようとしていた人間の娘と出会う。

話すうちに興味を抱き、2000年ぶりに28番目の愛妾として初めて人の娘を娶る。
魔族と平安貴族娘の寵愛話。

設定

ガレリウド・グレイム

伯爵級の魔族。年齢は5000歳以上。

戦場では負け知らずで殲滅將軍、貴族の中では黒伯爵という通名を持つ。

黒髪、黒目、190?、90?、日焼けした浅黒い肌、筋肉質。魔術を使うより、武器を振り回す方が好きという生粋の軍人。

力だけなら公爵級の魔族であるが、爵位に興味がなく軍団を任される折に伯爵の爵位を授けられる。

愛妾を27人抱えているが、最後に27人目を迎えたのは2000年前。

主君であり師父にも当たる侯爵に妃を見つけて来いと命令される。

中宮香子

平安貴族の娘。年齢は19歳。

本名は橘香子。たけはなのかし

帝の側室になるべくして蝶よ花よと育てられる。

14歳で入内して帝の寵愛を受け中宮となつて一女を産むが、後に帝が崩御し、内親王も病で亡くなる。

悲しむ間もなく、政略結婚に利用される身に絶望を覚えて自害しようとする。

黒髪、黒目、157cm、48kg。

のんびりおっとりした性格だが、言いたいことははっきり言うタイプ。

マデウス・ガレヴァーン

侯爵級魔族。年齢は30000以上と推定される。

戦場では鬼神と恐れられた魔將軍だが、老齡により前線は若い魔

族に任せて本陣で統率と命令を下している。

衰退気味と言いながら、力は計り知れず、配下を上手く動かす知将。

戦争孤児で生き残った当時少年魔兵とも言えるガレリウドの才を見出し、手元に置いて鍛え上げた。

白髪、紅目、187?、79?。

琴式部

藤壺中宮の女房。年齢は32歳。

琴の名手であり、家事も、和歌の文才なども多才稀なる人。既婚済みだったが、宮仕えを選び後に離縁する。

ほわほわとしている主に小言を聞かせるのが日課。

黒髪、黒目、160cm、51kg。

エンデイリシカ

高位魔族の娘。ガレリウドの27人の愛妾のうちの一人。

戦場で魔法を駆使して闘うことが好き。

紅髪、紫目、180cmの長身ながらダイナマイトボディ。

高圧的で自信過剰、好戦的な性格をしている。

レヴィン・ローゼルグ

伯爵級魔族。ガレリウドと同等の地位にある。

戦場ではマデウスの後継とまで言われるほどの知將軍。

罾や計略を謀るのを得意としており、罾のためなら味方をも殺す冷徹な面も持つ。

濃茶髪、緑目、褐色の肌、188?、77?。

ルフィア・ネイ

公爵級魔族の娘。

ガレリウドの抱える27人愛妾のうちの一人。

魔力の生成力が極端に低く、供給しないと肉体が減ぶため、ガレ
リウドが定期的に面倒を見ている。

かなりの猫かぶりで、嫉妬深い性格。

金髪、青目、童顔、150?、41?。

1・命令

その日、ガレリウド・グレイム伯爵は不機嫌を露わにしたまま、石畳の回廊に靴音をいつになく早足に響かせて歩いた。

回廊で話し込んでいた下級貴族や、伯爵とお近づきになると声をかけようとしていた貴婦人も、一様に怒りを帯びた様子に、只事ではない気配を察して道を開ける。

戦場に出ればガレリウドの後にはぺんぺん草すら何も残らないと有名で、ついた渾名は「殲滅將軍」だの、「黒伯爵」だのと呼ばれている。

ガレリウド自身、その渾名は好んでいないわけではない。

戦に勝ち続ける美德は、己が仕える閣下の戦功として認められるのだから。

全ては自分に戦の才能を見出し、引き出させて生きるための目的を与えてくれた師父のためなら、これからも戦勝をもぎ取って見せる。

そう、それがいつもの命令だった。

——しかし、今日ばかりは違った。

豪華な扉の前までくると、衛兵が「謁見中です」というのも憚らず、押しのけ重い扉を半ば爆砕させる勢いで開けた。

ズガ——ン！！

響き渡る謁見の間は、粉塵を巻き上げて、怯えた先客の一本角を持つ男爵級の文官が飛び退いた。

粉塵を軽く払いながら、年老いた老爺が飄々とした笑みを浮かべて、一段高くなった台座の豪華な椅子に顎肘をついて座っている。

彼の師父であるガレヴァーン侯爵、戦場では鬼神と呼ばれていたが、このところは隠棲気味の主君である。

「また派手に壊してくれたもんじゃのう。御主の財の使い方までケチはつけぬが、この扉の修理代にばかりかけておるようでは、妃を迎えるなど出来そうにないのう」

ガレヴァーン侯爵が手を翳すと、粉塵は消え失せる。

呑気な言葉にガレリウドは収まらぬ怒りを、近くにいた文官に向けて無言で散れと命ずる。

男爵級と伯爵では、明らかに伯爵の方が力が強い。

怯えた文官は、ガレヴァーン侯爵に頭を下げると逃げるように壊れた扉の隙間から這い出た。

「追い返さなくとも、御主が扉を壊したところで、会話は全て筒抜けであるう？」

からからと笑うガレヴァーン侯爵に対し、儀礼的に腰を折るものの、ガレリウドは不機嫌のままだ。

軍装の懷より手紙を取り出し、ガレヴァーン侯爵のテーブルの前に突き出す。

「閣下、単刀直入にお聞きますが、これはどういうことですか？」

「どうということも何も、そのままの意味じゃ」

「冗談は寝るか死んでからにして頂きたい」

「死んだら孫の顔が見れぬではないか」

しれっとしてまだからかうガレヴァーン侯爵に、ガレリウドはブチっという音がしそうなほど血管を眉間に浮きだたせた。

その様子が面白かったのか、ガレヴァーン侯爵は長く立派に生やした顎鬚を撫でながら問う。

「御主は何人の愛妾を囲うておるのじゃったかのう？」

「……27人おりますが、閣下」

「そうじゃろう、そんなに抱えておるのに、不思議と子が出来ぬではないか」

「閣下が心配なさることではありません」

「心配ではない。ただ孫が見たいだけじゃ。愛妾ばかりで妃の一人も作っておらぬのは、御主だけだからのう」

はあつ、と深い溜息がガレリウドから漏れる。

27人の愛妾のうち、ガレリウド自身が惚れ込んで娶った女は居ない。

ガレヴァーン侯爵に無理やりあてがわれたり、戦場で孤児になった娘や、勝手についてきた戦好きの鬼女などが殆どだ。

彼女らを嫌うわけではない、面倒を見るといふ名目での愛妾。

彼女たちの間に何事もなかったわけではない。

身籠った愛妾も居たが、全て産まれる前に死んでいる。

殲滅將軍というのは、子どもも殲滅するのかと何度ガレヴァーン侯爵にけなされたことか。

ガレリウドがガレヴァーン侯爵から受けた命令は、妃を連れて後継者を見せろという、戦とは全く関係のない内容だった。

「御主が妃を連れぬなら、また妃候補の娘を宛がうしかないのう」

「なッ——！？ これ以上、厄介な愛妾など要りませぬ。連れて来れば良いでしょう、妃をっ！」

面倒は御免だとばかりに、フンッと息を荒げてガレリウドは身を翻した。

「三か月じゃ」

「は？」

「三か月以内に連れて来い。それまで、御主は戦場に出さぬ」
「閣下！」

横暴だ。

あまりにも、酷い仕打ちである。

戦で勝つことが喜びで、生きる意味であるのに、三か月も謹慎のような生活には身体がなまってしまふ。

翻した身を、またガレヴァーン侯爵に向けたが、もう取り合う気はないとばかりに、手を振られる。

「ほれ、さつさと探るか愛妾を口説け。次の謁見がある。御主の予定ない謁見のせいで、今日の予定全てが狂ってしまうわい」

無然としながらも、儀礼的に一礼だけすると、ガレリウドは再び身を翻した。

2・希求

侯爵邸の謁見の間から退室し、回廊をまた早足で歩く。妃を作るとなると、相応に面倒なことになる。

ただでさえ27人の愛妾同士でも嫉妬や派閥がある。

住まいを分けて通うことで血を見る争いにはならないが、ここ数百年は様子を見る程度に訪れて回るだけとなっている。

魔族という長き生の中で、己に頼らなくとも独り立ちする愛妾も居るため、妃になりたいと虎視眈々と狙う愛妾と、戦場に連れてほしいという愛妾を適当にあしらうだけに通うだけだ。

妃にするなら、それらの気性激しい愛妾を黙らせるものか、動じないものでなければならぬ。

27人の愛妾の中から選ぶとなると、これまた鼻屑だのと厄介なことになりそうだった。

『――助けて』

不意に声が聞こえた。

悲痛、諦観、絶望を秘めた声音。

戦場で縊るように紡がれる言葉と同じだが、込められた想いが憂いを帯びている。

どこに声の主が居るのかと、辺りを見渡したが、貴婦人の熱い視線と笑みが返ってくるだけで、見つからない。

空耳かと首を捻ったが、この侯爵邸で聞こえたわけではないようだ。

「黒伯爵殿。どうかしたのか？」

今度は目の前から声がかかる。

同じ伯爵級魔族のレヴィン・ローゼルグ。

戦場では策を展開して侯爵の有力な後継者候補とも呼ばれる知将。傍らには珍しく貴婦人を連れている。

淡いオレンジの色をしたドレスを着た若い娘で、目が合うと恭しくお辞儀をしてみせる。

「レヴィン……。こちらは？」

「俺の一番上の娘だが。ああ、黒伯爵殿と会うのは三千年ぶりぐらになるか。閣下の晩餐に呼ばれてね、本来なら正妻を連れる所だが面倒くさいと振られてしまったので、仕方なく娘を連れてきたのだ」

晩餐。

そつえば、妃を持つとそのような面倒なこともあったか、と心の中でばやいた。

愛妾を伴って若い頃は軍の横繋がりを深めるためだとか何とかで無理やりに侯爵に参加させられたものだ。

伯爵の爵位を承ってから戦場に近い辺境に領地を得たために、この侯爵邸に訪れるのは数年に一度だった。

戦場への通達も、戦勝の報告も全ては配下の魔将が伝書鳩の如く担っている。

「そうであったか。……気づかぬうちに大きくなれたものだな」

「ふふ、27人も愛妾を囲う多忙な黒伯爵殿には、くれてはやらんぞ」

「そのことで侯爵閣下に文句をつけてきた所だ。妃を娶るまで戦場には出さぬとな。……危惧せずとも、そなたの娘を娶るつもりなどないわ」

ガレリウドが嘆息すると、レヴィンは面白そうに笑った。

ライバルとも言える立場にあるガレリウドが戦場に出ないとなると、全軍の統率を任されるのはレヴィンに向けられる。

大規模な戦であればガレリウドと軍を半分に分けて連携をとるものだったが、小規模程度ならレヴィンの軍団だけが戦場に行くこともあるからだ。

ガレリウドのように前線に立つて槍を振り回すことはないが、策を講じて陥れる戦を好むレヴィンにはやりと隠しもしない笑みを浮かべる。

「侯爵閣下に俺の功績を上げておく機会だな」

「好きにするがいい」

対してガレリウドに出世欲は全くもって皆無である。

敵視もしなければ、戦友というものでもない気がする。

『——助けて』

また、あの声が脳裏に流れた。

首を傾げた動作に、レヴィンが訝しそくに顔を顰めた。

「珍しく調子が悪そうだな、それほど戦場に出さないとされたのがシヨックだったのか？」

「いや。……微かに声が、聞こえただが」

「誰のだ？」

「知らぬ……」

「なんだそれは。まあ、黒伯爵殿に届く声など「殺してくれ」というようなものだろう。望み通りに殺してやれば良いだろう。——さて、レティ、そろそろ侯爵閣下が待ちくたびれているだろうから行くぞ」

からからとレヴィンが笑いながら、娘を連れて回廊を歩き出す。
ガレリウドは再び嘆息すると、侯爵邸の長い回廊をレヴィンと反対のエントランスがある方向へと歩いた。

脳裏に流れる声音はまだ続いている。

すれ違ふ貴婦人や、男爵級貴族が道を開ける中、声の主を探してみたが、その誰ともつかなかった。

「望み通りに殺す、か……」

レヴィンの言葉を反芻しながら、侯爵邸のエントランスを出ると一人呟いた。

希求の声は、確かに「殺してくれ」とでも言っているような悲痛の叫びだ。

どこの誰が呼びかけてきているのかは謎ではあるが、このまま呼びかけ続けたら睡眠妨害も良いところだ。

そのまま領地に戻ることなく、ガレリウドは転送陣のある門へと足を向けた。

3・藤壺の君

「香子さま、春宮さまから御文が届きましたよ」

下げた御簾の隙間から、使いに出していた女房の琴式部が、文を机に差し出した。

恋を綴った和歌が書き連ねられて、返歌を待つ文。

返歌次第で春宮の側室として即位された頃には弘徽殿に戻されるか、或いは先帝の寵姫で内親王の母として、今居る藤壺で慎ましく過ごすか。

本来なら、次期帝を振ることは天にも背くこと。

それはつまり、断れない。

返歌で春宮に嫌われるなりしなければ、この宮中からは出ることは出来ない。

しかし、うんざりした様子で溜息をついたのは、藤壺に住まう中宮香子。

左大臣家に生まれ、幼少より帝の側室として教養を身につけられた、生粋の貴族の箱入り娘。

14歳で32歳も年上の先帝の側室として女御の位で入内し、すぐに身籠ったためにあつという間に立后し、中宮まで上り詰めた。時の女性であるなら、誰もが羨むような生活が保障される。

——かのように思えた。

子を宿してから9ヶ月目に差し掛かった頃、里邸に下がって宮中を空けていた折に、先帝は突然の流行り病に伏して、そのまま崩御された。

女御として入内して、中宮となっても弘徽殿の間に住んでいた香子だったが、出産後の宮中へ戻る頃には、住居は弘徽殿ではなく藤

壺に移された。

49日の喪が明けて、先帝の弟である現帝が即位し、春宮には現帝の長子選ばれている。

それを快く思わなかった香子の父が、春宮と香子を結ばせようとしたのだ。

春宮から見れば伯父嫁にも当たる縁族ながら、この時代に於いては政治的な婚姻が物を言う。

宮中に戻って3年、内親王が3歳を迎えると、父は内親王を伊勢斎宮に選定して引き離した。

現帝の健康状態も芳しくないと聞く。

そこへ伊勢斎宮と引き離されて1年経つか、経たぬかのうちに、22歳になる春宮と、未亡人とはいえまだ19歳の香子を引き合わせたのは、政治的な目的がなければ結びつかないのも同然と言えた。藤壺で過ごす4年の間に、春宮以外に若い親王や大臣に求婚の和歌を送られたが、父は帝か春宮以外にしか取り次がぬように女房に言い含めていたのだろう。

帝の側室になるべく育てられたのだから、それが当然とばかりに。

「春宮さまからの文だというのに、浮かない顔でございますね」

琴式部は返歌の代筆をするために筆を準備し始めている。

このままいけば、父の思惑通りに事が進み、また子供を産むことを望まれる。

内親王ではなく、親王を産んで、その子が春宮に、そして帝へとなれば、父は喜ぶのであろう。

そう出来るまで、道具に成り下がるのが、香子に強いられた生の意味。

「……琴式部は、わたくしが春宮さまの側室になっても良いと思っているの？」

「あら。香子さまは本当に奥ゆかしいですね。たいそう可愛らしいのですから、きっと春宮さまにも気に入られて中宮さまとなられるでしょう。その方の世話を出来るといのは、宮仕えの女にとって一番の喜びでございます」

和歌の才能もあり、琴を弾かせれば名人という女房は、得意の琴をとって琴式部と呼ばれている。

忠実で主人を立てる言葉も、確かに悪い気はしない。

この者が、自分の女房で居てくれることを、香子は、いつも感謝している。

「そうね。……でも、わたくしは——春宮さまと結婚したいとは思っておりませぬ。きつと、生まれてくる時代を間違ってしまったのかもしれない」

物心ついた頃より、蝶よ花よと入内する身として相應しい教養を覚えさせられた。

けれど、それはいつも心が締め付けられる窮屈な想いも生んだ。父が認める帝になる人以外には、恋をしたり愛したりすることは出来ないのだと知った。

「まあ、他の女御様に聞かれたら、嫉妬されますよ」

「構いませぬ。……わたくしは、この柵から抜け出したいわ。先帝が崩御なされたのに、宮中に戻されることばかりか、また春宮さまに嫁ぐなど……」

「先帝さまのことが忘れられぬのですか？ 歳が違いすぎたのに、それほど閨が良かったのでしょうか」

「そうではありませぬっ！」

からかうような物言いをした琴式部に香子は思わず声を荒げると、

また溜息をついた。

先帝との閨は14歳という初心の身には、恐怖と悍ましさを植え付けられたもの。

この世にお産という痛みも命を落とすかと思うほどの痛みであったが、生まれた子は美しかったからまだ許せる。

けれど、閨という好きでもない相手に抱かれるだけの痛い仕打ちは、身も心も痛い。

助けてほしい。と、神社に赴いては何度も願ってみたけれど、状況は変わらない。

変えるには、自ら行動しなければ何も変わらないのかもしれない。落飾は父に見つかっては意味がないかもしれない、だが自害も宮中では認められていない。

「琴式部、返歌をお出しするのは、もう少しお待ちなさい」
「ですが、あまり待たせてしまうと、お心が離れますよ」
「少し考えたい時間が欲しいの。花見でもして心を落ちつきたいわ」
「それは良いですね。天気も良いですし、早速外出の手配をします」
「ります」

筆を置きなおした琴式部は、移動のために使う青車を手配に藤壺の間から退室していった。

香子は残された文を見つめて、手に取り目を通した。

何度見ても、あまり上手とは思えない恋文。

その恋文に交じった他に、色褪せた文がもう一つ畳まれていた。何だろうと思い、文を開けば訃報を知らせる文だった。

伊勢斎宮の訃報。

それは、つまり香子が産んだ僅か4歳にも満たぬ娘が亡くなった

ということ。

文の色褪せ具合から、それがいつのことかはわからない。
愕然とし、文を見つめる視界は涙で霞んだ。

4・悲観

琴式部が戻ってくる足音に、香子は文を隠すように元に戻した。恐らく琴式部はこの文を知っているはずだ。

全ての文は琴式部が取り次ぐことになっている。

主人宛ての文を勝手に読むというのはモラルに関わるが、中には好ましくない文が混じることもあるため、そうした文は取り次がない。

檜扇で顔を隠し、懷紙で目元を拭った。

「手配して参りました」

御簾が開けられ、どうぞとばかりに促される。

急いできたのか、琴式部の十二単の裾が翻っており、いつも着付けや、身のこなしに厳しいのに珍しい。

「ご苦勞様です」

「いえ。……あら、香子さま、御髪が乱れておいでですよ」

「それは、……琴式部を待つ間に温かな陽気にうとうとして、壁に寄り掛かってしまったから」

とつさの言い訳だが、琴式部は何も言わずに香子の前髪を手櫛で整えた。

その間は顔を隠しておいたが、寝起きの顔を見られたくないという風に捉えたのかどうか、何も突っ込まれることはない。

「すぐ傍に待たせておりますから、参りましょう」

「ええ……」

促され、香子は藤壺の間を後にした。

遅れて琴式部が文を片づけて、こつそりと色褪せた文を袖に忍ばせたのを御簾越しで捉える。

ああ、やはり……彼女は知っていたのだろう。

急いで戻ってきて裾が翻っているのも気づかなかったのは、余程、あの文を見られないようにと気を揉んだからかもしれない。

琴式部を問いたただすのは簡単なことかもしれないが、そうしたことで伊勢斎宮は……娘は戻ってこないのだ。

熱くなりそうな目頭を押さえると、首を降り、また扇で顔を隠したまま用意された青車へと乗りこんだ。

花見の名目で訪れた近くの山。

もう少しで満開を迎えるのだろうか、桜の花はまだ八分咲きといったところだ。

どの木が美しく咲くのかを見て回り、気に入る木の傍で立ち止まる。

「香子さま、こちらは崖に近いですから、もう少し足場の良い所へ参りましょう」

「そうね。でも、少し疲れてしまつて……。ここで休んでいますから、琴式部はこの木よりも美しい木を探して見せてくださいな」

「そうですか？ ……わかりました。動いてはダメですよ」

念を押すような琴式部に頷きを返し、見送る。

これで暫くは……他に人は居ない。

そう辺りを見渡すと、桜の木の傍にある崖を見下ろした。

眼下には川が流れており、落ちれば小桂姿の今なら重みで命を絶つことが出来るかもしれない。

だが、中々に踏み出すというのは勇気の要るものだ。

ごくりと、喉を鳴らして深呼吸を試みた。

身を投げれば、輪廻転生に従って次に生まれてくる時は、違う形で生まれることが出来るかもしれない。

夫と呼べた存在にも先立たれ、娘にも先立たれ、残った父には道具のように使われる。

そこに、香子としての人權はないに等しい。

きらびやかな宮廷生活は女の嫉妬と、男の権力争いに帝が振り回されている。

自分の人生を、自分で決めることのできないという絶望の淵に、生きる価値は見出すことが出来ない。

助けてと願っても、願っても……誰にも理解されない。

じやりつと砂音を立てて、崖に足を踏み出した。

目を閉じれば、きつと一瞬で逝けるはず。

目を開けたときには、きつと新しい命として生まれているはず。

ぎゅつと目を閉じて、身を乗り出し、崖の大地を蹴るようにして飛んだ。

「香子さまっ!？」

琴式部の声音が落ちている身の中で聞こえたような気がしたが、意識はすう——と遠くへ沈んだ。

あの子だけは、わたくしが死んだら悲しんでくれるのかしら。

入内した頃より、仕えてくれている琴式部。

年齢差はあるものの、いつも親身になってくれていた。

時には厳しく、時には優しく、姉のような存在。

せめて、彼女にだけはごめんなさいと、一言謝っておくべきだったかもしれない。

だけど、彼女なら……他の女御さまにも、きつと気に入られる優

秀な女房となるだろう。

将来を絶望としか思えていないわたくしなどに仕えるよりも、ずっと……ずっと、出世なさる女御さまに就くことが、彼女の夢なのだから。

これ以上、縛るわけにはいかないのだ。

風を切る速度が増し、身体が何かにぶつかるような衝撃が香子に走った。

けれど、それは不思議と痛くはない。

先帝や娘は流行り病で苦しんで死んだけれど、己はこうまでも楽に死ねるものなのだろうか。

それとも死は感じる事が出来ないから、わからないだけなのか。どちらにしても香子の意識は、そこで途絶えた……。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3057y/>

黒伯爵の妃

2011年11月10日02時15分発行